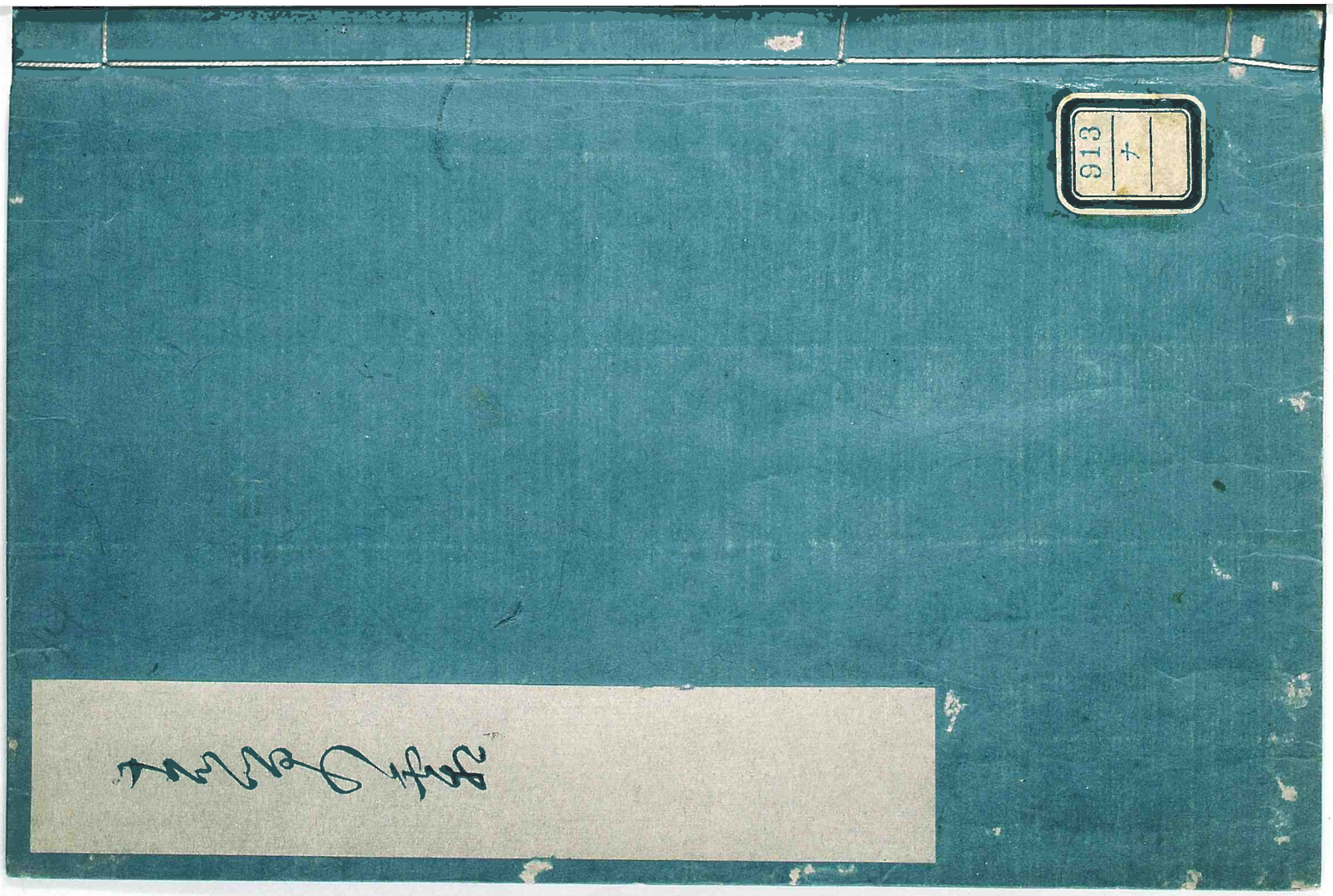
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9


913
+

913
ナ

はるの霜

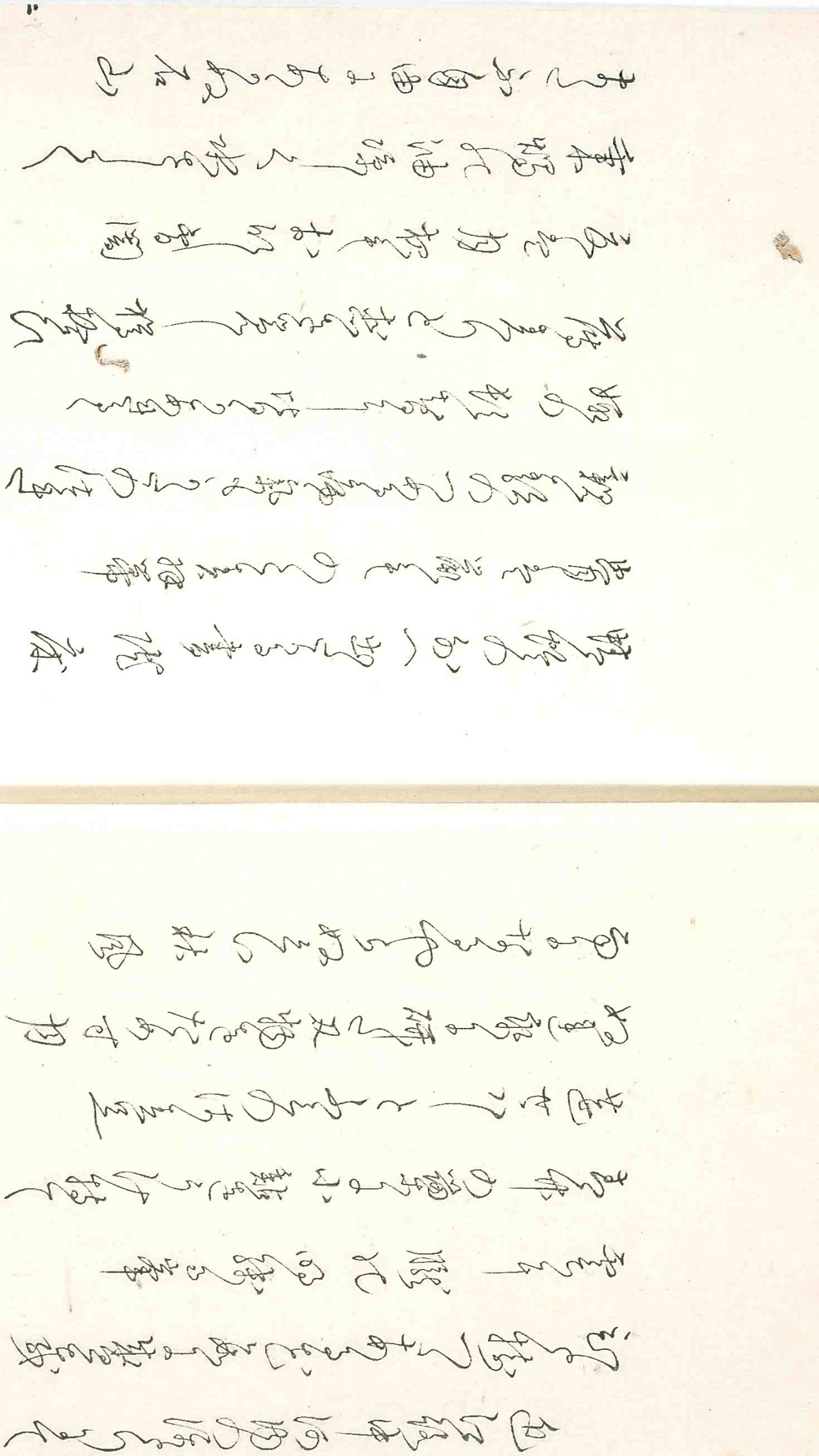
一冊

湯浅四郎氏寄贈
74

圖書部 第五百五十六号

茶嶋

愛知県文化会館
昭 35.2.16 和
51002
A913
ナ



近江後中河内の深さりまて
初と持つてあるを無に繁哉　而后
雲千　勝比　明練る峯　烏津
春作の藥に小鮎をうけ持て
甚せかしとふこの清き足
ぬまに水に研る刃物をため寸月
面になるやらぬえい　秋風

蛙蛇の分へ出たる書院　床
貴を蔵もの　こと表紙帯
親類のつゝある病氣もうこの清き
姫の頼替にはなりあまるく
薄まりと惑をいふし　移捨ひ
夜を月松もお所し曹閣
秉燭に油涼しく水をしく
まさふ自由にあらぬ石山

乃ちと付く一話にある供
畾乘もしらき牧湾の舟
廣前の貢杖されら槙跡く
雲の中に波の中ゆる
書文乃に来ても振鼓を喰てあり
まとりた如き鎌におるある
子祭りの古備をのを買ひたらへ
競取おして書ける貸を話

洋
丘

惚まやりの足ねといって屁をもち
文を志として鉢色のまち似
帷子ハ鶴目も服にてまゐし
鏡手桶を松取りし法を
石灰（シックヒ）ゝ膏のとまる松に鉢
古ゝ貴ゝ貴ゝ犬に吼つく
イモ据ゝらきたへ月にさし
二段まく茅に藍の吹ゝ

鴨よ氣の清夢ハ小雀もとく澄り
烟り見ゆるしの夢る鶴舟
お居せ首に先出来ある初と日和
うまく煮る鰯の筒切
今朝宮を此清和之此粒をて
雲のわかれの雪とけ草

東内者を指まりよあく深氣の風　鳥津
靜かつまくむかふさり日　桂康
月ちうまさ丁場ここに小雪紛く
洗人ハ雪の強る間引菜
咲もこまるしひく枯となり
殘る舟荷に無事なるを

鶏鳴て宮下はあくまき銀杏
君はうりまて踏まは琵琶(アヘラ)
ようやくさはゆうおこそうて雀の鷲
灯に揺る影の通りて鱗
尾にかかる露をも誰をうつろひく
雪降りの松寄る帯かろわをよ
滿月も晴て氣の清く灯も冴え
尾と折發れあるいとあるさけり

畑(ハタ)鐸をてにもりつられて葡萄
鳥の雲をも浴る吉きも
稲もと葉との百毛年によりり
清しきひとる吉丈れ庵
浦波の音さへ来たる舞のまて　李
雲助とことの藻白き服　律
鋭(メリヤス)肩をはつして袖よかうらみ
温泉の壺ハ湯く入らる清れ　美

流ひとけて平りつゝる夏埃り
豆腐ちるゝ中之門志める里
手えまて光縄時斗れ燃せまり
船にまあしと封疆を証り
根を見ゆる二階れあけを明し
月光人葉も根をまゝぬ杖
春雨のちらく遠る鰯雲
二十九日（ヒツマリ）村の柳を植に出る

平押に今度の座たちのよく
舞てを重き甘蔗（イモ）の蜻蛉
埒を明く裸烟管を腰にさし
流り社の乞事し高輪
雲とんるまて八鳴ぬやまのを
弥生なり事りて日れぬ力

葬の凋も遥き山家の鞋　鳥津

流まり流むまで雲の月　李曠

砂糖挽牛の鞭臆に杖たまて

急な泊りの宿わりも来寸

ぬくいとて油所はならぬ雲用意

朝の掛菓に黄色の糞

余客し松も四五重のぬけく

来婦まるを廣り移る

世渡りも仕あく尺ゆる嵯峨の町

なまめまつれて菓筵を移る

胡葱の嵯（オクヒ）氣も恥ぬ意をして

さめきらぬ服に裁うる箸

出る月に子初虹をあとまれし

波をまりけり春の雨うる

墾田の百年祝ふ掛り酒
蹇車　械をましらせ
雷さん来ハ来よりしれ蝉しらせ
芝れ雲宮の黒き石壇
まりまふり黒に白ふ赤の飯　暖
尺わきれ　やら雄俊ませぬ名主　洋
浮めれに出ても役所ハ氣のはりて
残て手まふつまむ山蟹（ケシケシ）蟹

熱のない菰にハやのて眠なり
荷持とひへと女生のましまし
のかくと者れ殘ンに蓍いまこく
矢さへ通こぬ風れ小く
石塲の裏の山茶毛咲に今り
やまぬ枝扇をとめる打鐙
石的のまりとめる新法師
まはや寝る れ新のこす也

湖を魚(エリ)箔にせハある冬陣し
眼にハらんそのことをあらる面
風を敷をたんて肩に古着買
此忌年にそいれ三采安
競ひけり菊の櫻の鶴から夫
ふとり深きりてぬるむ漸の春

研澄まる鎌にみ高るしられ哉　鳥津
峠の湖を芦のまるらの　柿谷
芝曲寒つくりまく樊噲を
生平の魚の来を募へ当
結幕の垢にちらく月のさし
漸寒くなる溜り戸の音

業し　おろす扇もんとくに逢
咲飯菜せんひきんの香のする
法会の後の譜句あり挿花小大名
数寄屋の草庵の鼻緒ゆるある
卯の花の眠りし障子に数しまて
おろき幟の竿にさま人　力
うつる代に今は清洲も呂の　雑
ゆくころにして紳士の茶のうま

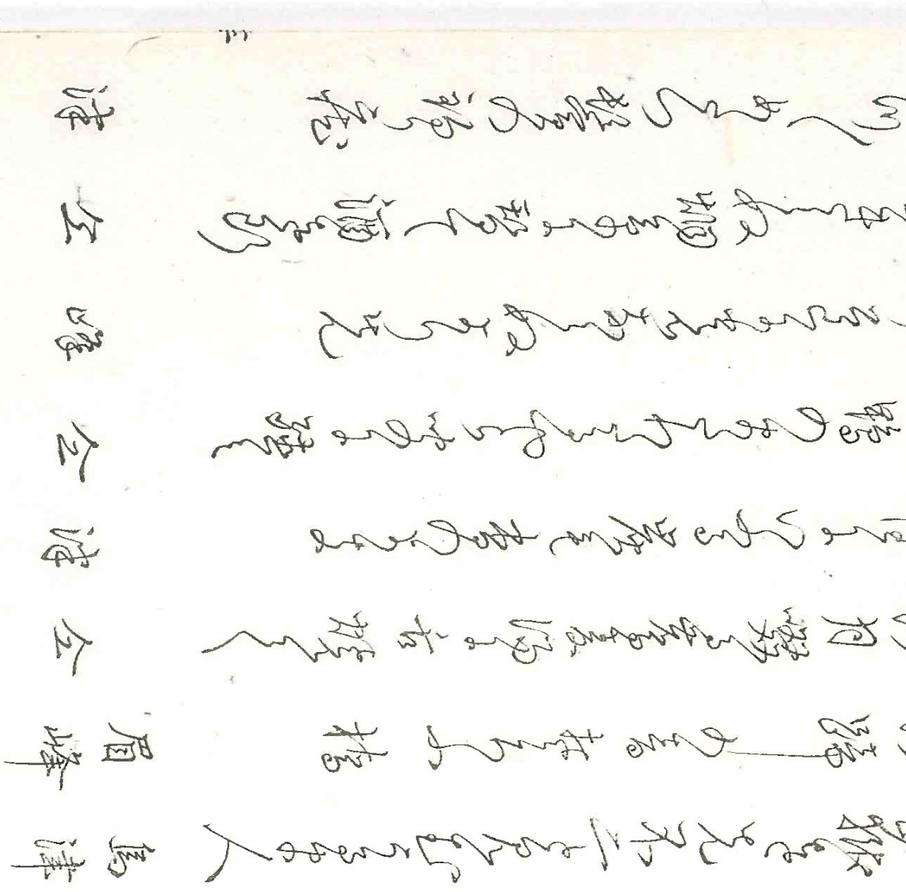
わかれ来し説もさして老し　昭文
見られてみそ脚達とらく
炬燵八分もとさきの雲
浄山館のこある　人静
年五の一陽につまる　暦　筍
雲はりの夏淋酒に酔ふ
小者畑にわすれし桜をとりやり
袖とめてちらし　妹が髪　明

谷

津

[illegible]やけぬ是咽のうま
法鈴事すまき六條の鐘
鐘鈴のせいりて深さめりて
長竿はきをうゆゑ菜嚙を
穴鈴に和さへわかぬ罪のよを
いふ人是ていなまさし賞
月に讀明鈴の角力に組合
手本あらしまた五の杉風

杉風に鳴子の和そうれそめて
鶯の持病そきまさおとろへ
味噌桶に口あける日を書てはり
武家も及ぶ坊官に富
強者家き人の出力に菊もゆゑ
雪もひとりに心とまあふ



中山王使来朝して書てに
東役へさしかり楽にてると
人々ことわりまゐしきあるし
なり事れを

御嶽を先不二とゝ見むうるまの人　烏津
弱の歸しの青おちふ　橋　眉峰
胡の月嘆る春夏海に舌焼くく　仝
世住にいふる岸も書のよま　津
巻鴨のおこわるやら中のに殖を　仝
思りそこに生んならぬより先　峰
やうまゝぬ烟まりに暫て酒をあり　仝
深川しめこつ鬢の鶴り庵　津

梅り香をうつす　三尺のもとりしく　峰
廊の風根の見ゆる草家　津
きらしと地の野る一面あらり　峰
青さを飛れの三とる青る　津
梅あとの葉をこの葉のとり合て　峰
情乗法度に石菓氣未市　津
鍼醫者の柳の礎（フラスコ）の壜をもりしく　峰
もき眉毛の似合しな　敷　津

あかれさき志る人ハしる月は雲　峰
小鍋の鳥も推根をさまの春　津
鶴半ようなる姫も周年事　仝
ぬれかへ是ハ廣まきの中　峰
お熊に小鍋の落る古酒是口　津
塗まぬりしまつも持のうち　峰
三ツをある雲猿に臣燵あけたれ　津
いとみし粉に葉ゐるまふ　峰

あまたなる社務にわづれ領地也　洋
はこゝ浦のよまる石垣　峰
鶴鶴のひとりふたつそ絶すなり　洋
絵をかゝて布子ゑる林　峰
萬ぬ月形もしたりもはや満て　洋
抹木をあまた輝嶋ゆるある　峰
出刀ゑるも媚絵きふ好屋　岌
乗をへまれぬ少柄をしる　洋

まあ水と名ゑらゝ川も春めきくく　仝
ちりしく花の樹に残る葉　峰
鯉の笑当ぬまにまて遠あまり　仝
風さらよき星寿の宝　洋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

柿岩

眉峰

愛　知　県
1103267770